

エディット・シュタインがピオ十一世に宛てた手紙

木 鎌 耕 一 郎

目 次

はじめに——公開された手紙

解 説

ピオ十一世に宛てた手紙（エディット・シュタイン）

はじめに——公開された手紙

エディット・シュタインは1933年の春、ユダヤ人であるという理由からミュンスターでの教育職の地位を解雇された。ドイツにおけるユダヤ人迫害が激化する中であって、エディット・シュタインは時の教皇ピオ十一世と謁見し、反セム主義を弾劾する回勅を交付してもらうよう直に嘆願しようと考えていた。しかし、その年が「聖年」にあたり、膨大な数のカトリック信者がローマへ巡礼に訪れることから、エディット・シュタインは結局教皇との私的謁見を許可される見込みがないことを知った。そこでエディット・シュタインは、彼女の霊的指導者であったワルツァー師と相談の上、教皇に嘆願の内容を詳しく明示した手紙を送ったのである。しかしこの手紙に対しては、ピオ十一世からの祝福を示す返信があっただけであったという。この一件についてエディットは次のように書き残している。

この手紙が開封されないまま教皇様のもとに届けられたことを知っています。その後しばらくして、教皇様が私と私の親族を祝福する旨のたよりを受け取りました。ほかには何も起こりませんでした。その後、ときおり私は、この手紙がほんの一瞬でも教皇様の心を横切ったのかどうか心配になりました。ドイツのカトリック信者の将来について私がかつて予言したことは、ここ何年かの間に次第に現実のものとなっているのです。¹

これまでこの手紙がバチカンに所蔵されていることは知られていたものの未公開文書として扱われていた。従って我々がその手紙の内容について知る手立ては、エディット・シュタイン本人が簡潔に触れている記述以外皆無であった。ところが昨年（2003年）の2月に、教皇庁はピオ十一世（在位1922～39年）在位中の公文書を公開するにあたり、同教皇に宛てたエディット・シュタインの手紙も同時に公開した²。手紙が書かれた年から実に七十年、エディット・シュタインが

¹ Stein, Edith, *Selected Writing*, ed. by Susanne M. Batzdorff, Templegate Publishers, 1990, p. 17 を参照。

² 公開されたエディット・シュタインの手紙の全文（英訳）は、公開後 Institute of Carmelite Studies（合衆国のカルメル会研究所）の出版局 ICS Publications の HP (<http://www.icspublications.org/>)

列聖された1998年10月から数えても4年以上の月日を経た後の公開であった。

この手紙は短い文面ではあるが、エディット・シュタイン研究にとっての新しい資料としての価値に加え、戦後ユダヤ人社会からカトリック教会へ向けられ続けている非難や、1998年に発布された教皇庁の歴史的文書『私たちは忘れない——ショアーについての反省』に見られる教会の姿勢と比較してみると興味深い内容であることが知られる。本稿では、エディット・シュタインがピオ十一世に宛てて記したこの手紙について解説を試みた上で、試訳を以って紹介したい。

解 説

啓蒙主義の影響から19世紀初頭にヨーロッパのユダヤ人がゲッターから開放されたのは東の間で、やがて迎えた二十世紀には国民国家主義、帝国主義的な社会的影響力により、彼らは再び過酷な迫害の対象になった。言うまでもなく、その迫害が組織的に最も徹底して行われたのは、アドルフ・ヒトラー率いるナチス党が政権を掌握したドイツとその占領諸国であった。このような状況下で、当時のカトリック教会に期待されていたひとつのあり方は、有効な政治的手段を講じることであった。ところがナチスの台頭にあたり当時のバチカン教皇庁が行ったことは、1933年にドイツとの間に政教条約(Concordat)を締結したことである。この締結を実現したのは、ピオ十一世のもとで国務大臣を務めた後の教皇ピオ十二世(在位1939~58年)である。政教条約の目的は、ドイツ国内の教会とカトリック信者の宗教的活動の保障と擁護であるが、政治的には当時のロシアのスターリンによる共産主義体制の拡張を抑える目的もあった³。

当時のカトリック教会の姿勢に関して、戦後、ユダヤ人社会からは「沈黙」や「共謀」といった言葉とともにたびたび非難の声が挙がっている。ユダヤ人にとってカトリック教会の「政治的」対応は、「政治的」の二次的な意味、すなわちある種の抜け目なさや条件付きの行動を意味するものと映ったからである。とりわけピオ十二世の姿勢に対しては、戦後書かれたドイツの劇作家ロルフ・ホフフートによる『神の代理人』の影響から、非難の声が一般化している。

しかし実際には、ナチスが政教条約をしばしば違反したことから、ピオ十一世は1937年に「燃えるような憂慮を持って(Mit Brennender Sorge)」という回勅を交付し、これを強く非難している⁴。またピオ十二世も、大げさでない仕方ではあるがユダヤ人を迫害から救済し、戦後ローマのユダヤ教首席ラビから感謝の意を受けたことも知られている。この種の歴史的事実には諸説絡み合っているようであるが⁵、概してピオ十一世とピオ十二世時代のバチカン外交政策は、共産主義を危険視するが他のことについて公には中立的な立場を貫いた点において共通していたように

のNews(Spring 2003)に紹介された。また、米カトリック中央協議会(司教団)の機関紙 *Origins* CNS documentary service, Vol. 32: No. 39, pp. 655-656 (March 13, 2003) にも“Saint’s Letter to Pius XI on Nazism Asked Church to Speak Out”として掲載された。本稿ではこれらをもとに邦訳。

³ マシュー・バンソン/長崎恵子・長崎麻子訳『ローマ教皇事典』pp. 190-194, 及び pp. 295-297 を参照。

⁴ この回勅はドイツへ密かに持ち込まれすべての教会で読み上げられたという(上掲『ローマ教皇事典』p. 191)。この回勅がエディット・シュタインの嘆願に応えたものとの見方(『カトリック生活』2003年5月号, ドン・ポスコ社 p. 40)もあるが定かではない。むしろ、予想を超えたナチスの蛮行に対する教会の対応と見るべきであろう。

⁵ 最近のバチカンの報道(ZENIT・CJC)が、1922~1939年間のドイツ教会との関係文書を教皇庁が公開するに伴いバチカンの枢機卿(後のピオ十二世)がユダヤ人の救済に尽力したことが明らかになったと伝える(ゴスペル・ジャパン HP (<http://www.gospeljapan.com/>)「世界キリスト教情報」第637信2003年3月3日付)など、この種の問題に関しては未だに議論が尽きないようである。

思われる。

さて、ナチスのユダヤ人迫害政策に抗議する教皇の政治的行動は、エディット・シュタインが期待していたものでもあった。上述のように、件の手紙は1933年の春にピオ十一世のもとへ送られた。皮肉なことにナチス・ドイツとの政教条約が締結されたのはこの年の7月である。

この手紙について、後にエディット・シュタインの親族が発言している内容を紹介しておきたい。エディットの姪に当たるスザンヌ・バツドルフは、ナチスのユダヤ人迫害が激しさを増した1939年に家族とともに合衆国に亡命した人物で、エディットの著作の英訳や執筆、講演などの活動で知られている。スザンヌ・バツドルフは、自身の編集による『エディット・シュタイン選集』所収の「アウシュビッツの殉教者」（1987年4月12日に *New York Times Magazine* 誌に掲載された記事の再録）という文章の中でこの手紙について次のように記している。

私の叔母が自分のユダヤ人仲間を見捨てたと感じていなかったということは、修道院に入る前に、彼女がピオ十一世にドイツの国家社会主義政府の反ユダヤ政策の罪を告発する回勅を出してもらうように懇請の手紙を書き送ったことで明らかである。彼女自身におけるカトリックとユダヤ教との結びつきや、彼女がカトリックの大学研究者と仲間関係にあるポジションである事を利用して、自ら仲介者となり、道義に訴える勧告を通して劇的な変化をもたらすことを希望していたのである。その彼女の大胆な行動は、確かに、彼女がまだユダヤ教の家族と遺産に忠義をもっていたことを証しするものである。1938年10月に書かれたウルスラ会修道院の修道院長への手紙で、彼女は次のように語った。「私はエステル王妃のことを何度も繰り返し考えないわけにはいきません。彼女は、自分の民のために王の前に立つというはっきりとした目的のために、自分の民の中から連れ出されました。私はとても貧しく頼りない小さなエステルですが、私を選ばれた王は、無限に偉大で慈悲ぶかいお方です」。教皇の共鳴を得ようという彼女の試みの失敗は、痛々しい失望だったはずだ。⁶

姪のスザンヌ・バツドルフにとってエディット・シュタインの手紙は、叔母がユダヤ教信仰を離れてカトリックに改宗した後も、ユダヤ教との結びつきを忘れるどころかむしろ自らユダヤ人であることを痛烈に意識し、同胞が置かれた不条理な状況に強い痛みを覚えていたことの明確な証しとして捉えられている。同様の趣旨は、スザンヌ・バツドルフがカトリック系の雑誌 *America* 誌において列聖式に参加したことについて報告している記事の中でも言及されている。彼女はこの手紙について「私が知るかぎり、バチカンの封印された諸記録の中にまだうもれている」と断った上で、回勅の公布を求めようとしたエディット・シュタインの行為を次のように評価している。

エディット・シュタインは、カトリック信者とユダヤ人の間によりよい理解をもたらしたいという願いにおいて、時代を先取りしていた。まったく悲しいことではあるが、ショアー、ホロコーストの恐怖は、教皇ヨハネ二十三世の決意で1962年に第二バチカン公会議の開催で始まった広範囲の変革をもたらす契機となった。その公会議から、こうした深い変革がどっと始まったのである。エディット・シュタインは、ユダヤ人であるという理由で殺された何百万人もの人々のたった一人にすぎない。彼女は教皇ピオ十一世への嘆願において、自らがその子孫であるところの民のために訴えかけたのである。

⁶ Susanne M. Batzdorff, "A Martyr of Auschwitz", *EDITH STEIN Selected Writings With Comments, Reminiscences and Translations of her Prayers and Poems by her niece*, Templegate Publishers, 1990, pp. 110-111

エディット・シュタインの手紙であろうと、他の誰か、より著名な人物の議論であろうと、教皇ピオ十一世に反ユダヤ主義を非難する回勅を發布するように駆りたてることはなかったであろう。しばしば言われることであるが、1937年に公にされた彼の回勅 *Mit Brennender Sorge* は、エディット・シュタインの嘆願への回答であったという。しかしながら、この文書は、彼女が手紙を書いてから4年経つまで發布されず、ユダヤ人についての言及もないのである。⁷

こうしたスザンヌ・バツドルフの見解に見られるように、ユダヤ人との連帯意識を持って行動した彼女の試みはある種の賞賛の対象として受け取られている。しかしながら、実のところエディット・シュタインのこのような形でのユダヤ人との連帯感とは、本来ユダヤ人にとっては意味を成さない感情であったはずである。なぜならばユダヤ教信仰から離脱し別の信仰を採用した者は、もはや「ユダヤ人ではない」というのがユダヤ的論理であるからである⁸。そのためエディット・シュタインが列福された際、ユダヤ人社会から挙がった多くの抗議の声は、カトリック教会がエディットを「カトリックに改宗したユダヤ人」という彼らにしてみれば矛盾を含んだ人物像として描いた事に対して向けられたのであった。その意味で彼女の行為に対する賞賛の感情は単純ではない。この賞賛は手放しの賞賛ではなく、手紙が宛てられた教皇ピオ十一世ないしはカトリック教会の権威に対する非難と表裏一体の関係となって初めて意味を成すのである。

この点についてエディット・シュタインの甥に当たり、現在カリフォルニア州に在住しているアーレスト・ビバーシュタインとその息子ミカエルの言葉は参考になろう。ユダヤ教改革派の雑誌 *Reform Judaism* 誌の記事において次のような憤りを示している。

私は、列聖式のために印刷された二百ページの冊子で、自分の顔を覆い、グレゴリア聖歌を聞いている。本の最初は、聖エディットの七ページの伝記に当てられている。エディットが1933年に教皇ピオ十一世に宛てた手紙——ヨーロッパのユダヤ人を絶滅させるとする反ユダヤ主義に立ち向かい、反旗を翻すことを懇請した——について言及がなかったことに、驚きはしなかった。教皇は行動を起こさなかったが、エディットが書いているように、「後になって、私は、私と私の家族を祝福する彼の手紙を受け取った」という。彼女のもっともすばらしい時間は、言及するに値しなかったのだ。彼女の訴えの手紙は、手にいれがたいまま、バチカン公文書館に深く埋もれている。…中略…事実、彼女がナチスに殺されたのは、ユダヤ人の一人としてである。教会は彼女を通して、ホロコーストのもう一人の犠牲者であるという態度をとっているのであろうか。捕らえられたとき、エディットが残した言葉は「私たちの民のために行きましょう」とされており、不信心なユダヤ人のために購いの自己犠牲を提起している。彼女は洗礼を受けた後でさえも真実にユダヤ教徒であると感じていたという。彼女についてしばしば引き合いに出される言明は、「真の」ユダヤ教を理解するためには改宗が不可欠であるということを暗にほめかしている。加えて辛辣な皮肉ではあるが、かつて彼女と彼女の生前の嘆願を無視し、その宿命を放置したバチカンは、今になって彼女に対してはつきりしない動機から賞賛を浴びさせるつもりなのである。⁹

⁷ Susanne M. Batzdorff, "Aunt Edith Jewish Heritage, Catholic Saint", *America*, February 13, 1999, The Jesuits of the United States and Canada, pp. 19-20

⁸ このような論理について、拙論の研究ノート（注解・訳）「エディット・シュタインをめぐるユダヤ教ラビの見解」『八戸大学紀要第26号』2003年に掲載したダニエル・ポリッシュらの見解、及び Michael A. Signer, "An Irresistible Choice." *Reform Judaism* (Spring 1999, Vol. 27, No. 3); Eugene Fisher, "Saint Teresa Benedicta's Challenge for Our Times." *Holiness Befits Your House Canonization of Edith Stein—A Documentation—* Edited by John Sullivan, OCD STD ICS Publications Washington, DC 2000などを参照。

⁹ Ernst Biberstein, With Michael Biberstein, "A Protest Unacknowledged", *Reform Judaism*

教会に対するこの種の非難や疑念の根底には、言うまでもないが長きにわたりユダヤ人がキリスト教社会において被ってきた迫害の記憶がある。カトリック教会は戦後、第二バチカン公会議(1962～1965年)を開催し、キリスト教以外の諸宗教に対する排他的態度を改め、相互理解する姿勢への方向転換を図った。ユダヤ教との関係については『キリスト教以外の諸宗教に対する教会の態度についての宣言』、通称 *Nostra Aetate* の第4条項に記された。

教皇庁は *Nostra Aetate* の精神の具現化に向けて1974年に「ユダヤ教との宗教的関係のための委員会」を設置している。これによりユダヤ教に関わる公的な対応が組織的、制度的なものとなった。同委員会は、1975年に『公会議の宣言 *Nostra Aetate* 第4条項を応用するための指針と提案』、1985年に『カトリック教会の説教と教理においてユダヤ人とユダヤ教を正しく表現するための覚書』などの文書を交付している。とりわけ1978年に教皇に選出されたヨハネ・パウロ二世は、それまで以上にユダヤ教ないしはユダヤ人との様々なレベルでの関係改善に取り組んでいる。同教皇の精力的な言動には、ユダヤ人が多く在住していたポーランドで生まれ育ち、大戦中に故国でのユダヤ人迫害を目の当たりにした個人的体験も影響しているという¹⁰。

同教皇はよく知られているように、東西冷戦の崩壊をはじめ、政治的に影響力のある諸言動を展開してきた¹¹。イスラエル共和国とバチカン市国との国交正常化についても、1992年に合同委員会を設置し、二年後の1994年には国交正常関係を正式に樹立させている。イスラエルとの外交関係という実際的な問題は、ユダヤ教との関係改善のために避けることができない懸案であった。一般に、教皇の政治的発言は、バチカン市国という国家の元首のものとしてよりは、全世界のカトリック信徒の代表としての性格を持つため、基本的には宗教的な次元に立脚している。しかしその政治的影響力は決して小さくない。だからこそ第二次大戦中のナチスによるユダヤ人迫害政策に対して、カトリック教会が積極的に反対の姿勢を示さなかったとする非難、すなわち、政治的行動が求められていた時に教会がそれを怠ったとの非難がユダヤ人社会の間で繰り返されるのである。

1998年3月16日に教皇庁が発表した『私たちは忘れない——ショアーについての反省』という文書は、対戦中のこの一件に対する現代のカトリック教会による立場を明らかにしている点で重要である。この文書は、「ユダヤ教との宗教的関係のための委員会」が作成し、前文に委員長のエドワード・イドリス・キャシディ枢機卿へのヨハネ・パウロ二世の挨拶が添えられている。その内容は、ユダヤ人とキリスト教徒の関係について確認し、ショアーの原因についてのカトリック教会の認識を示した上で、両宗教が共通の未来をともに構築することを提唱している。そして過去のユダヤ人への迫害、とくにナチスによるユダヤ人の大虐殺の悲劇を忘れてはならず、「記憶」する義務をキリスト教徒が負っていることを呼びかけている。この文書は、過去にキリスト教諸国で繰り返されたユダヤ人迫害や蔑視に対してキリスト教徒もその責任を担っていることを直視し、公式な謝罪を示すものであった。同時にこの文書は、キリスト教の第3千年紀を機に、これまでのキリスト教徒の罪を認めて謝罪し和解を求める『記憶と和解——教会と過去の種々の過失』¹² という教皇庁国際神学委員会による文書の交付を間近に控え、その意向をユダヤ人に対して

(Spring 1999, Vol. 27, No. 3) pp. 28-31

¹⁰ 宮平 宏・藤谷 健『ローマ法王—世界を駆けるヨハネ・パウロ2世』(岩波ブックレット No.537) 岩波書店 2001年、「ローマ法王ヨハネ・パウロ2世の実像」制作 WGBH ヘレン・ホイットニープロダクション (アメリカ 1999年)などを参照。

¹¹ 竹下節子『ローマ法王』ちくま新書 1998年 pp. 137-178

¹² 教皇庁国際神学委員会『記憶と和解 教会と過去の種々の過失』(東門陽二郎訳) 日本カトリック中央

は、「密接な絆」のゆえに特別に重要視した形で表明したのと言うことができよう。

……ほかのだれよりも教会は、ユダヤ民族との精神的近親関係のきわめて密接な絆のゆえに、また過去に自らが働いた数々の不正の記憶のゆえに、無関心ではられません。教会がユダヤ民族ともつ関係は、教会がほかのどの宗教ともつ関係とも異なります。しかし、問題は過去を思い起こすことだけにあるではありません。ユダヤ教徒とキリスト教徒の共通の未来が、わたしたちが記憶することを要求するのです。「記憶なしには未来はない」からです。歴史自体が、未来の記憶なのです。¹³

この文書では、2000年来のキリスト教国におけるユダヤ民族の境遇を次のように分析している。まず、キリスト教徒が過去において、しばしばユダヤ人を差別し、虐殺した理由として、ユダヤ民族に関する新約聖書の誤った解釈の影響がキリスト教世界において一般化した歴史を挙げている。すなわち、誤った聖書解釈という宗教的次元の要因が反ユダヤ主義の社会的風潮を生み、18世紀の終わりまでユダヤ人への迫害やゲットーでの隔離が行われたとされる。一方19世紀には、多くの国で民族主義がおこり、それに伴う社会的変化がユダヤ人をヨーロッパの諸地域で異分子として捉える風潮の原因になった。すなわち19世紀の反ユダヤ主義は、「本質的に宗教的というよりは社会的、政治的なもの」と分析している。

20世紀のショアーについては、より細かな分析を施している。民族主義の高揚は、20世紀になってからドイツの国家社会主義を生み出した。この国家社会主義は、アリア民族の優秀性と他の諸民族の劣等性という差別の図式を描き、第一次大戦後のドイツ国内の問題解決と国民の自尊心の再構築の方法として、多くの人々もこれに協力的であった。こうしてユダヤ人への迫害は、国家や民族を神格化する国家社会主義というイデオロギーによって推進された。したがって、ショアーの直接的原因はこのような政治的次元に根を持ち、キリスト教とは別の次元に属するとされる。このことを説明するに当たり、本文書では、「反ユダヤ主義」と「反セム主義」という用語を使い分けている。

このように人類が一つであり、すべての民族と国民が同等の尊厳性をもつとの教会の変わらぬ教えとは対立する学説に基づく反セム主義 (Anti-Semitism) と、反ユダヤ主義 (Anti-Judaism) と呼ばれ、これにはキリスト教徒も有罪とされる不信と敵意の古くからの感情との間には違いがあり、わたしたちはこれを無視することはできません。…中略…ショアーはまったく現代的な新異教的政権の仕業だったので。その反セム主義はキリスト教の外にその根を持ち、その目標を達成するためには躊躇することなく教会に立ち向かい、その教会の信徒たちに対する迫害も行ったのでした。しかし、このナチスによるユダヤ人迫害は、なんらかのキリスト教徒の頭と心の中に埋め込まれた反ユダヤ主義の偏見によっていっそう容易になったのではないかと問うことができましょう。国家社会主義が政権を掌握して始めたユダヤ人迫害に対して、キリスト教徒の中にあった反ユダヤ的な感情がキリスト教徒を鈍感にし、あるいは無関心にさえたのではないのでしょうか。¹⁴

協議会、2002年

¹³ 本稿では和田幹男「キリスト教とユダヤ教の対話の歩み——第2ヴァチカン公会議から20世紀の終幕まで——」【人間文化第3巻】英知大学人文科学研究室、2003年3月 pp.161-175 所収の同文書の邦訳を使用し、同書 pp.51-71 の解説を参照した。また同氏の HP (<http://mikio.wada.catholic.ne.jp>) にも訳が紹介されている。

¹⁴ 同上。

このような線引きは、ユダヤ人に対する迫害に、宗教的次元と政治的次元という二つの要因を峻別する意味をもつ。すなわち、ショアーについては、その直接的原因を政治的次元に基づくものとし、それをカトリック教会は強く非難する姿勢をとる。カトリック教会がその罪を認め謝罪しているのは直接的原因ではなく、前者の宗教的次元に基づく要因、すなわち誤った聖書解釈による反ユダヤ主義の拡大という周辺の、間接的原因である。

さらに、このように国家社会主義の非人道的政策に反対せず、無関心でいたキリスト教徒の存在を認め、謝罪すると同時に、ナチスによるユダヤ人迫害に立ち向かったキリスト教徒もいたことを示し、彼らを賞賛している。その中にはユダヤ人社会から非難的となっている時の教皇ピオ十二世も含まれる。

しかし、ユダヤ人社会が対戦中の教会に承認を求めているのは、ナチスのユダヤ人迫害を阻止するカトリック教会、とりわけ教皇権による政治的働きかけが為されなかった事であった。本文書はその「為されなかった事」について基本的に触れていない。本文書は、ユダヤ人迫害についての詳細な分析とそこに含まれるカトリック教会の責任の自覚を表明するという斬新さを備えながら、そもそものユダヤ人社会からの非難に対してはその非難が拠って立つ前提に沈黙する形をとったと言うことも可能であろう。

さて、エディット・シュタインが記した手紙には、このショアーに関する教皇庁文書との共通点が見られる。それは、国家社会主義を「民族と国家を神格化」する異端的なイデオロギーと捉え、ユダヤ人迫害をその帰結と見る点である。またその責任の一端を、多くの人々の沈黙の態度にも見ている点である。さらに手紙冒頭で「ユダヤの民の子供として、神の恵みによって、11年前からカトリック教会の子供になったもの」と表現される「ユダヤ人のカトリック信者」という彼女の自己認識は、教会がエディット・シュタインを列福する際に採用した表現に等しい¹⁵。しかしその表現は、ユダヤ教側からユダヤ人のアイデンティティにとって不適切であるとして否認されたものである。一方でエディット・シュタインの嘆願の内容は、ユダヤ人社会が示す「教会の沈黙」に対する評価に共通している。だが、そのような教会の沈黙はショアーに関する教皇庁文書では触れられなかった。

エディット・シュタインの記述に見られる二つの異なる信仰共同体との重層的な関係性は、現代にいたるまで両宗教間の不一致を象徴する問題となっている事柄である。したがって公開されたエディット・シュタインの手紙の内容は、単なる史的資料ではなく極めて現代的なメッセージを含んでいる。エディット・シュタインはすでにこの時期に、現代のカトリックとユダヤ教の宗教間対話における未解決で進行中の問題のいくつかを先取りして提起していたと考えることができる。こうしたことを第二バチカン公会議以前に同時代的に教皇に進言していたことは驚くべきことと言えよう。

エディット・シュタインがピオ十一世に宛てて記した手紙は、彼女がナチスに連行されガス室で惨殺される九年前に書かれたものである。内容全体については以下の拙訳を参照されたい。ここでは文末に記される「無条件的な献身」という言葉について一言しておきたい。

「無条件的な献身」について語られる文脈によれば、エディット・シュタインがこの手紙を書いた時点で、すでに殉教への内的な決断を持っていたことを暗示していたと考えられる。「無条件的

¹⁵ 列福式の説教について *L'Osservatore Romano*, Weekly Edition in English, no. 20, May 18, 1987 を参照。

な献身」とは、文面どおり、当時のカトリック信者に向けられた言葉であろうし、やがてユダヤ人のひとりとして受難に遭うことを予想していた自分自身に向けられたものでもあろう。受難は自らの命を友のために捧げる行為へと直結すること、すなわち「殉教」という形で自らの命を捧げる選択枠を、彼女が現実のものとして受け入れていたことが予想されるのである。エディット・シュタインは、現代においてなお未解決な問題を独自の方法で解決した。彼女が最終的に自らに課した解決策は、ユダヤ民族と連帯し、その救いのために自分の命を神に捧げることであった。すなわちそれは、神と自己と隣人（この場合、彼女と同じユダヤの民を指す）の関係における、純然たる宗教的次元における解決であった。

同時に「無条件的な献身」という言葉の意味は、この手紙を宛てた教会の権威に向けた懇請でもある。すなわち、教会が沈黙を止め、国家社会主義に対するパチカンの強い政治的行動がなされること、それも利害関係に基づく策略的な行動ではなく「無条件的」に為されることを、彼女は嘆願していたのである。それは彼女の心の中に、教会にもし政治的役割が存在するのであるならば、純然たる宗教的動機に支えられた「無条件な献身」こそ相応しいとの確信が存在したからであろう。

暗黒の時代にあって、時の教会権威に対し「無条件的」な献身を嘆願し、自ら殉教者としての意志を持って死に向かったエディット・シュタインは、純然たる宗教的次元に基づいてこの世界と対峙する生き方を、身をもって証示したと言える。公開されたこの手紙は彼女の生き様が提起した問題をよりリアルに浮かび上がらせ、憎悪と報復の論理で幕を開けた二十一世紀に生きる我々の諸選択に訴えかける力を持っている。

* * *

ピオ十一世に宛てた手紙

エディット・シュタイン

教皇様！

ユダヤの民の子供として、神の恵みによって、十一年前からカトリック教会の子供になった者として、私はドイツの何百万もの人々を憂鬱にしていることについて、キリスト教の父に向かい畏れを承知でお話し申し上げます。

私たちは、ここ何週間かの間、隣人愛は言うまでもなく、正義と人間性の意味を嘲るような、ドイツで繰り広げられている行動を見てきました。国家社会主義の指導者たちは、ここ何年もの間、ユダヤ人への憎悪を扇動しています。彼らが政権を掌握し、明らかに犯罪的要素を備えた党員たちが武装するに至り、今日、この憎悪の種が芽生えているのです。政府はつい最近、行き過ぎが生じたことを初めて認めました。私たちはどんな程度であれ、発言することはできません。なぜならば、言論の自由が抑圧されているからです。しかしながら、私が個人的に学んでいることから判断すれば、こうした状況は、珍しい例外的なケースではありません。国外からの反応による圧力のもと、政府は「さらに穏やかな」政策に転換しました。政府は「いかなるユダヤ人も、頭髪の本一本さえも傷つけられることはないはずだ」というモットーを打ち出しました。しかし、ポイコット政策——人々から生計や市民としての名誉、及び祖国を強奪することによる——を通して、政府は多くの人々を絶望へと追いやりました。たとえば、先週一週間の間に私は、個人的な情報筋から、これらの敵意の結果として、五件の自殺のケースを知らされました。私はこうし

た状況が、更に多くの犠牲者をもたらす一般的な条件であることを確信しています。人は、これら不幸な人々が彼らの災難を耐え忍ぶもっと大きな精神力を持ち合わせていないことを遺憾に思うのかもしれませんが。しかし結局のところ、その責任は、彼らをそこまで追い詰めた人々に帰せられるべきです。そしてまた、そのような出来事に直面して沈黙を続ける人々にも帰せられるべきです。

すべては、自ら「キリスト者」と自称する政府に端を発して起こったことであり、日常茶飯事としてなおも起り続けているのです。何週間もの間、ドイツ、そしておそらく世界中で、ユダヤ人だけでなく何千人もの信心深いカトリック信者は、このようなキリストの名の乱用を止めさせるように、キリストの教会が声を上げるのを待ち望んでいると思います。ラジオによって大衆の意識をうち崩しているこのような民族や政治的権力の偶像崇拜は、公然たる異端ではないでしょうか？ ユダヤ人の血を破壊する運動は、私たちの救い主、そして祝せられた乙女と使徒たちの、最も神聖なる人間性を悪用することではないでしょうか？ そしてまた、このことは、平和と一致の一年を意図するこの聖年に、汚点を残すことになりはしないでしょうか？

もしこの沈黙が更にまだ続くのであれば、私たち——教会の信心深い子供たち、そしてドイツの状況を目を見開いて見ている者たち——は皆、教会の信望にとって最悪の事態を恐れます。現在のドイツ政府とともに平和の獲得に達するためには、この沈黙が長く続くことはありえないと私たちは確信しています。当分の間、カトリックに対する攻撃は静かに、そしてユダヤ人に対するよりは残忍でない仕方で、しかし同じような組織的な仕方で行われることでしょう。もしカトリック信者が、新たな行動に向かって自分自身を無条件的に捧げなければ、ドイツでカトリック信者が誰も聖務日課を唱えることができなくなる日まで、そう長くはかからないでしょう。

あなたの聖性の足元で、使徒的な祝福を望みつつ

(サイン) エディット・シュタイン博士、ドイツ教育学研究所講師
ウェストファリア、ミュンスターのコレギウム・マリアヌムにて

出典

“Saint’s Letter to Pius XI on Nazism Asked Church to Speak Out”, *Origins* CNS documentary service, Vol. 32 : No. 39, pp. 655-656 (March 13, 2003)